

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第10回 第4.1節～第4.3.1節

2018年5月15日

小田 勝

第4章は「ヴォイス」を扱った章で、第4.2節が受身、第4.3節が可能・自発である。高校生向け古典文法書17点をみると、助動詞「る・らる」の文法的意味の掲出順序は次のようになっている（小田勝2014b）。

- a 「自発・可能・受身・尊敬」の順 9点
- b 1 「受身・尊敬・自発・可能」の順 5点
- 2 「受身・自発・可能・尊敬」の順 2点
- 3 「受身・可能・自発・尊敬」の順 1点

「る・らる」は自発を本義とする説（例えば橋本進吉、時枝誠記）と、受身を本義とする説（例えば山田孝雄）とがあるので、a bのように分かれるのだろう。ただ、aのように「自発」を最初に置くと、高校生には分かりにくいかもしれない。この4つの中で、「尊敬」の意だけは新しく平安時代に生じたものなので、b1の掲出順はいかがなものかと思うが、案外多いのは、この順に唱えると口調が良いからだろうか。なお、吉田永弘（2017）は、中古の「る・らる」の文法的意味として「自発・可能・受身・主権」を立て、いわゆる「尊敬」は「主権」から派生したものとする。

さて、本書の補遺に入り、94頁「4.2.1 直接受身文」では、和文の例を1例追加しておく。

・上は下に助けられ、下は上になびきて（源・帚木）

95頁最初の◆（「に」句が旧主語ではない例）の類例を、念のため、1例あげておく。

・軍兵に駆られて（＝軍兵ニ徴用サレテ）宇治の手に（＝宇治川ノ守備ニ）向かひ侍りぬ。
（文机談）

「4.2.2 間接受身文」の96頁の◆、「現代語の自動詞の受身文は必ず迷惑の意を表す」と書き、「必ず」に下線まで付したのは、言い過ぎであった。この反例としてよくあげられるのは「風に吹かれて」である。しかし迷惑の意を含意しない自動詞の受身文が限定的であることは確かだろう。古典語の、「迷惑を表さない自動詞の受身の例」を追加する。古典語の自動詞の受身文は「迷惑読み」の制約がない。

・うちはへて (=ズット長ク) 住まるる人は (=男ニ通ッテ来ラレル女ハ) 七夕の逢ふ夜ばかりは逢はずもあらなん (躬恒集) <詞書「七日 (=七月七日) 人におくる」。仲ノヨイ夫婦ヲカラカッタ歌>

・風渡る浜名の橋の夕潮にさされて [浜名川ヲ] のぼる海人の釣り舟 (続古今 1730) <「さす」は「上げ潮になる」意の自動詞>

97 頁「4.2.3 非情の受身」、最初の◆の数値について、川村大 (2012:149) の調査では、非情の受身は、『源氏物語』で 10.6%、『枕草子』で 23%であるという。98 頁、1 番目の◆の類例をあげる。

・卒塔婆の年経たるが、まろび倒れつつ、人に踏まるるを (紫式部集・詞書)

第 4.2.3 節の次に、節を新設する。

4. 2. 3' 誘因の受身文(新設)

受身文の旧主語が動作の行為者ではなく、動作の誘因 (受身文の新主語の動作を引き起こす原因) になっている場合がある。

- (1) 月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど (堤・花桜折る少将)
- (2) 「[私ハ] こなたになむ、いと影涼しき篝火にとどめられてものする」とのたまへば (源・篝火)
- (3) 中宮のいよいよ並びなくのみなりまさり給ふ御けはひにおされて (源・竹河)

旧主語が抽象名詞であることがある (現代語の「規則に縛られる」のように)。

- (4) 重科によつて手足も体もやつさるるも、一日の命をたべと降をば (=低頭シテ) 乞ふ。(保元)
- (5) 名利に使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。(徒然 38)
- (6) 後漢の貳師將軍は、城中に水尽き渴に責められけるとき (太平記 10)

「4.2.4 受身文と他動詞・使役と同意」の 99 頁 1 行目は、節名の通り「意図的な受身は、他動詞・使役と同意になる。」に訂正する。同頁、用例(3)(4)の類例、

・さらば君山藍の頃も過ぎぬとも恋しきほどに來ても見えなん (=私達ニ姿ヲ見ラレテホシイ=私達ニ姿ヲ見セテホシイ) (紫式部集)

・帝の使、匈奴の国に至りて、蘇武を尋ぬるに、早く死ににきと偽り答へけり、未

だありとばかりだに古里人に聞かればやと思ふもかひなし。(蒙求和歌・詞書)

用例(5)(6)の類例。

・あしひきの山がくれなる桜花散り残れりと風に知らすな(歌合・28 天徳合) <「知らるな」拾遺 66>

・春霞たち隠しつつ君待つに風に知らせぬ(=知ラレヌ)花とこそ見れ(出羽弁集)

99 頁の用例(7)(8)は、本「補遺稿」連載第3回に「2.5.3 意志動詞の無意志的用法」として新設した内容。(7)も決して特異な例ではなく、近世の例であるが、「男の、女房を五人や三人殺して後、[後添イヲ]呼び迎へても、科にはならじ。」(好色五人女・5)も「死なれて」の意である。

100 頁「4.3.1 る／らる」。中古の「る／らる」に肯定可能の例がないという通説に基づき、「不可能と自発は表裏の関係にあつて」と述べた。要するに右下の図のように考えたのである(下例も参照。下例は順徳院(1197-1242)の御製)。

・影しあれば[藤波トイウ]折られぬ波も折られけり^{みぎは}汀の
藤の春のかざしに(新後撰 150)

	自発	可能
肯定	○	×
否定	×	○

これに対し、吉田永弘(2013)は、中古の「る／らる」に肯定可能の存在を認め、中古のそれは、望んだ事態が非意

志的に実現している「既実現可能」しか表さなかったことを指摘した。吉田永弘(2013)によれば、非意志的な事態の実現において、主体がその実現を望んでいるものが「可能」、実現に対する望みの無いものが「自発」であつて、「非意志的な事態の実現」という点で中古の両者は共通しているわけである。用例(6)～(11)のような、自発とも肯定可能ともとれるような曖昧な例が存するのも、そのためだろう。類例をあげる。

・かく[アナタ(源氏)ガ]渡りおはしますを見給へ侍りぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も心清く待たれ侍るべき。(源・夕顔)

新刊の『読解のための古典文法教室』を授業で使っている。第3講、例題[14]③の訳「死んでしまった子は」は(新全集もこのように訳しているのだが)、原文は「死じ子(<死にし子)だから、「死んだ子は」とすべきであった。

[出典追加] 蒙求和歌①源光行(1163-1244)②1204年③新編国歌大観 10(平仮名本)

④片仮名本=新編国歌大観 10

[引用文献追加] 川村大 2012『ラル形述語文の研究』くろしお出版